

# 日本的経営と産業社会

津田 真 澁  
名 東 孝 二 編  
青 沼 吉 松

新 評 論

# 日本的経営と産業社会

津田 真激 編  
名東 孝二  
青沼 吉松

新評論

## 執筆者一覧

序章	名 東 孝 二 (日本大学教授)
第一部	
第一章	津 田 真 激 (一橋大学教授)
第二章	唐 沢 和 義 (慶応義塾大学講師)
第三章	山 田 暁 (日本大学助教授)
第四章	田 口 昌 宏 (帝京大学専任講師)
第五章	岸 田 尚 友 (豊田工業大学助教授)
第二部	
第一章	川 合 隆 男 (慶応義塾大学教授)
第二章	笠 原 靖 志
第三章	小 泉 幸之輔 (日本大学教授)
第四章	武 田 実 (城西大学教授)
第五章	唐 沢 昌 敬 (公認会計士)
第六章	武 井 昭 (高崎経済大学助教授)
第七章	菅 野 英 孝 (福島女子短期大学助教授)
終 章	青 沼 吉 松 (慶応義塾大学教授)

## は し が き

ジョン・ウォロフ『幻の繁栄ニッポン』と題する訳書が講談社から刊行された。ウォロフ氏はアメリカのフリーライターだが、訳書には原題もなく、また訳者の原著作についての紹介もない。だが、氏の数多い日本批判の著作の一つであることに間違いはない。『幻の繁栄・ニッポン』をあげたのは、この著作がいわゆる「日本の経営」を徹底的に攻撃していることである。日本の企業経営の過剰雇用、低効率、低生産性を指摘し、その「集団主義」の罪を責める。読みすすむうちに読者はJ・C・アベグレンの『日本の経営』(一九五八年)を思い浮べらるう。アベグレンのこの著作は日本の経営の戦後の原型をえがき出し、それを高く評価したものと日本では受けとられており、日本の学者や評論家たちが日本の企業経営の後進性を躍起になって攻撃している時に、アベグレンは逆にその長所を指摘していたという評価が定着している。

だが、それは虚構である。なぜならばアベグレンは『日本の経営』の第七章で日本の企業経営がその特徴のゆえに低生産性であるという否定的断定をくだしているからだ。アベグレンはこの著作を一九七〇年に復刻するにあたって、理由をあげずにひっそりとこの第七章を削除している。

ウォロフの著作はアベグレンの一九五八年の著作の現代版だといってよい。そしてそれゆえに大いに読まれるべきだともいう。ウォロフの「日本の経営」への批判の背景には明らかに「アメリカ的経営」の優位性の主張がある。この姿勢はアベグレンと同一である。

日本の経営については多数の著作がすでに刊行されているが、その特質の理論化に共通の合意が形成されているわけではない。誰でも論ずることができるが、誰でも他者の理論を否定することができるのが現状である。本書もまた『日本の経営と産業社会』と題して日本の経営論に一矢を投ずる。だが、本書の刊行にはいくつかの意義がある。その意義を本書の構成を紹介することによって明らかにしたい。

第一部『日本の経営の諸問題』は五章で成りたつ。この五つの章では産業社会との関係で日本の経営の意義を論じ、また日本の経営の共同的性質をより深く検討することがこころみられている。その意味で日本の経営論に一層の深みをもたらす意義をもっている。

第二部『産業社会の構造変動』は七章で成りたつ。いずれも日本の経営の検討を基礎におきながら産業社会学の視点から現代日本の産業社会の変化の解析をこころみている。

本書は青沼吉松教授の還暦を記念するために教授の先輩、知友、門下生が集まって執筆者を構成した。そのこともあって、本書が一貫した構成になるように名東孝二教授が本書の序章を、青沼教授が終章を担当している。青沼教授の今後の一層の御健勝を執筆者一同で祈念したい。名東教授の生活経済学、青沼教授の産業社会学の領域から日本の経営論への参加がおこなわれたことは本書の最大意義であると考ええる。

本書の刊行の配慮をいただいた新評論社長二瓶一郎氏に執筆者一同から謝意を表したい。

昭和五七年二月

編者代表 津田真澄

## 目次

序章 現代企業の経営理念	名東孝二	一
一 まえおき		一
二 単純思考批判と多様な人間と生活の論理へ		四
三 人間価値の実現と人材本位制		九
四 社会的価値・業績の諸問題		一四
五 企業能力の社会的活用の実態と評価		二〇
六 再生産構造の修正		二二
七 新時代の三次元要請		二七
——市場経済よりも家計経済中心のエコロジカルな循環経済の構図		
第一部 日本的経営の諸問題		
第一章 日本の経営の本質	津田真澄	三六
一 はじめに——構図の視座		三六
二 日本の経営の要素群		四〇
むすび		五七
第二章 日本社会の高学歴化・中高年齢化と企業対応	唐沢和義	五九
——効率と就業者と組織構造に関連して——		
一 中高年齢化社会とは		五九

目次

二 企業にとって効率化経営…………… 六二

三 効率化への組織編成…………… 六四

四 中高年齢者の処遇と効率…………… 六九

第三章 日本的経営と産業社会…………… 七九

一 問われる日本的経営…………… 七九

二 産業社会と組織…………… 八四

三 産業社会の転換…………… 八九

第四章 現代経営における共同体の一側面…………… 九二

一 日本的経営とよばれるもの…………… 九二

二 共同体と集団主義…………… 九五

三 協働関係…………… 九九

四 共同生活体と企業体質…………… 一〇一

第五章 西ドイツの企業経営と日本的経営…………… 一〇六

はじめに…………… 一〇六

一 共同生活体の日独比較…………… 一〇七

二 西ドイツ企業内の社会関係…………… 一〇九

三 企業経営の日独比較…………… 一一六

四 日本的経営の長所と短所…………… 一二八

第二部 産業社会の構造変動

第一章 脱産業社会と中流意識…………… 一二五

——現代日本の中流帰属意識化状況をめぐって——

川合隆男…………… 一二五

一 現代日本における中流意識の増大とその諸相…………… 一二六

二 階級意識の構造と脱産業社会状況…………… 一三五

三 中流意識と歴史意識をめぐる問題…………… 一四〇

第二章 低成長、不況の深化と労使関係…………… 一四五

——「経営参加」論と社会システムの統合をめぐって——

はじめに…………… 一四五

一 「すぐれた適応力」とは…………… 一四六

二 経営組織における同化、統合機能…………… 一四七

三 労使間の問題処理システムの動揺と新しい対応…………… 一四九

四 企業経営の危機と「経営参加論」…………… 一五〇

五 社会システムにおける統合の危機…………… 一五五

笠原靖志…………… 一四五

第三章 カンパニー・ユニオン…………… 一六五

まえおき…………… 一六〇

小泉幸之輔…………… 一六五

一 代表問題の本質…………… 一六一

二 労資協調論批判…………… 一六四

三 労働委員会制度…………… 一六六

四 親睦会組織…………… 一六九

第四章 労働と資本の迂回的一致…………… 一七六

——産業民主化という課題に関連して——

武田 実…………… 一七六

目次

序言…………… 一七六

一 資本の論理…………… 一七七

- 二 勤労所得と資本所得……………一八〇
- 三 資本と労働の迂回一致……………一八三
- 四 独立性をもつ大企業経営者……………一八四
- 五 労使協調体制……………一八六
- 六 産業の国有化と大企業性悪説……………一八七
- 七 産業の民主化……………一八九
- 八 中小企業の位置づけと社会的賃金の二重構造……………一九四
- むすび……………一九七
- 第五章 今後の企業経営——戦略経営——……………一九九
- はじめに……………一九九
- 一 経営戦略……………二〇〇
- 二 経営戦略の効果と諸制約……………二〇八
- 第六章 サービス価値の経済構造とこれからの企業形態……………二一四
- 一 企業から個人中心の経済への転換……………二一四
- 二 第三次産業の進展とサービス価値……………二一六
- 三 サービス価値と非市場経済……………二二〇
- 四 サービス社会における企業形態……………二二三
- 第七章 高等教育大衆化の行方……………二二九
- 一 「大学離れ」……………二二九
- 二 アメリカの大学不況……………二三三
- 三 アメリカの大学不況をもたらしたもの……………二三四
- 四 日本の「大学離れ」の原因……………二三六
- 五 大学離れの経済史的考察……………二三八
- 六 高等教育大衆化の行方……………二四五
- 終章 脱産業主義と官僚制からの脱皮……………二五二
- 日本の経営に視点を求めて——
- 一 産業主義の台頭とその限界……………二五三
- 二 プロフェッショナルリズムによる方向づけ……………二五八
- 三 官僚制からの脱皮……………二六七
- 四 脱産業化に対応する組織形態……………二七四
- 五 日本の経営とマトリックス経営……………二七八

青沼吉松教授 著書・論文(二八三～三〇三)

編 者

津 田 真 激 (一橋大学教授)  
名 東 孝 二 (日本大学教授)  
青 沼 吉 松 (慶応義塾大学教授)

日本の経営と産業社会

1982年4月10日 初版第1刷発行

定価 3,000円

編 者 津 田 真 激  
名 東 孝 二  
青 沼 吉 松  
発行者 二 瓶 一 郎

発行所 株式会社 新 評 論

T160 東京都新宿区西早稲田3-16-28

電話 東京 (202) 7391番  
振替 東京 6-113487番

落丁・乱丁はお取替えます

印刷 凸版印刷  
製本 凸版製本

© 1982年 津田真激・名東孝二・青沼吉松 (検印廃止)

3034-340030-3177